公民館学習会「石仏と民間信仰」

第 715 号
発行人●豊丘村公民館
館長　原　国人
編集人●長野県下伊那郡
豊丘村公民館報
編集委員会
0265－35－9066
印刷所●龍共印刷株式会社

私たちの村
（9月1日現在 ※外国人を含む）

男	３，３４３人
女	３，３８５人
総人口	６，７２８人
世帯数	２，２００戸

今、路傍の石仏に光をふたたび

現下の新型コロナウイルス感染拡大を踏まえて、七月まで中止となっていた公民館学習会は、必要な感染対策を講じて開催され、七十名余の受講生の皆さんが集まり、「集い、学ぶ」ことの大切さを教えてくれたものとなった。

今年度第一回目となる公民館学習会が八月二十一日に開催された。学習会当日には、距離をとって並べた会場のイスは一杯になり、この講座の開講を多くの方々が待ち望んでいたことは嬉しいことである。

当日開講にあたって公民館長から、コロナ禍で事業の開催がままならない状況を踏まえて、人々が集うことの意義に触れ、「公民館は、自分が他者とともに生きているという実感を得られる場であり、感染防止に細心の注意を払いながら、それに打ち勝つ人間として、集っていきたい」と挨拶があった。

講師として迎えた郷土史家の酒井幸則氏（林里在住）からは、「道の辺の石仏に手を合わせる心と、民間信仰」と題して熱のこもった興味溢れる講演があった。

村内におそらく一千体余と見られる石仏のほとんどは、江戸時代に造立されたもので、主として仏教信仰に関わるものが多く、私たちに身近な「庚申塔」をはじめ、「甲子塔」、「馬頭観音」、悪疫を防ぐために村境に造立された「道祖神」、養蚕が盛んであった当地によく見られる「蚕玉様」や「蛇神」や「ねこ神」、葬祭仏教にまつわる「十王」、更には山岳信仰としての「富士浅間神」、「秋葉山大権現」など、酒井氏からは、多くの石仏と、その謂れを紹介していただき、私たちの先祖の熱い信仰心を窺い知る機会となった。

（公民館事務局）

石造文化財調査委員会発足

プロジェクトチーフ　片桐林三

石造文化財調査事業は、四月に事業の推進役であるマネージメントチームを設置し準備を進めてまいりました。この事業では、実際に自分の担当区域内を足で歩き、点在する石造文化財個々の位置と種類を確認し写真撮影を行うという非常に根気のいる作業が重要になります。この取り組みをお願いすることになるのが調査委員の方々です。

プロジェクト会議で何回かの打ち合わせを経て、調査をお願いする委員の方二十名が決定し、調査委員会が正式に発足することになりました。委員をお願いする方は村内在住の方が大半ですが、中には現在は村外に在住しているが、生まれ育った豊丘村の石仏に接したいと志願してくださった方もいます。

九月十日に調査委員会のキックオフが行われ、事業の趣旨・スケジュール・具体的な調査方法等、全員で確認しあい、冬から来春にかけていよいよ調査を開始することになります。

武田信玄狼煙上げ

8月29日

武田信玄狼煙上げに願いを込めて

公民館社会部長　菅沼秀夫

第十三回を数える狼煙上げは八月二十九日（土）に公民館社会部が担当して、飯田下伊那そして上伊那を一望出来る村民グラウンドに於いて行いました。

今年はコロナウイルス感染症対策もあり、史学会と林原木門地区役員、本館社会部の関係者のみで実施しました。

午前九時三十分ごろより全員で狼煙台の仕上げを行い準備万端、今か今かと「神之峰城跡」「富田城跡」で狼煙が上がるのを待ちました。

参加者全員で遠くに見える狼煙を確認、午前十時十三分点火、たちまち白い煙が、風もなく晴れた大空高くコロナウイルス終息の願いを込めて「もくもく」と立ち上がり大成功、我が狼煙を見て高森町の狼煙場からも煙が上がりました。

狼煙の歴史は古く、弥生時代に始まり江戸時代まで使われていたと聞きます。狼煙リレーは、戦国武将の武田信玄が情報手段として用いた狼煙を再現するイベントで、地域の歴史や文化を学び、地域間交流による活性化にも繋げようと二〇〇八年に飯田下伊那地域で各公民館が中心となり始まったものです。

その後上伊那、諏訪地域にも拡大、今年は根羽村から辰野町までの十四市町村、計二十三か所で順次狼煙が上がりました。ちなみに山梨県側でも二〇一六年から毎年四月の「信玄公祭り」に合わせ北杜市から甲府市に至る狼煙リレーが行われているそうです。

二〇二一年は武田信玄の生誕五百年に当たる記念すべき年。両県をまたぎ飯田下伊那地方から諏訪地方を経て山梨県甲府市の武田躑躅ヶ崎館（現在の武田神社）までの初めて壮大な狼煙リレーが行われることが期待されています。是非このイベントに参加したい思いを繋げるため、コロナウイルス感染対策で大変な時期に小規模になりましたが実施させていただきました。

段丘

NHK連続テレビ小説『エール』は、作曲家の古関裕而（1909－89）をモデルにしている。生涯に5千曲作ったといわれる古関は、第二次世界大戦中は軍歌も作った。戦時中に最も歌われたという『露営の歌』（♪勝って来るぞと勇ましく…）も古関の手による。出征兵士はこの歌で小旗を振って送られた▼敗戦が迫った1944年の暮れ、古関は『比島決戦の歌』に曲をつけた。歌詞には強烈な繰り返し部分がある。「いざ来いニミッツ、マッカーサー／出てくりゃ地獄へ逆落とし」。米軍の指揮官の名前を挙げ、殲滅を煽っている。詩情は皆無だが、作詞の西條八十は軍部の横やりをうけてしぶしぶ書いたのだそうだ。古関も後年「この歌は私にとってもいやな歌」と語り、レコードも残っていない。古関には人を殺める曲を作ったことへの悔恨が、いつまでも残ったのだろう▼『露営の歌』もそうだが、戦時中は新聞社などが高額の懸賞金で軍歌の歌詞を募集し、国民は競うように応募した。軍歌は社会の熱狂でできており、音楽家だけが戦争を鼓舞したと断罪することはできない。大衆と芸術の厄介なかかわりが、戦争の中にある▼戦争が終わって19年後、平和の祭典東京オリンピックが開催された。入場行進曲は古関作曲の『オリンピック・マーチ』だった。

（壬生雅穂）

公民館グループ再開

各公民館グループは、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため春先から活動を自粛してきましたが、多くのグループで活動が再開されています。活動の様子を写真で紹介します。

なお、毎年恒例の公民館主催夜間ソフトバレーボール大会は、新型コロナウイルスの影響で参加を見合わせるチームが多くエントリー数が少なかったため、女子の部のみ一日限りの交流戦という形で大会を開催しました。（八月二十六日）

夜間ソフトバレーボール大会（女子の部交流戦）

Milky（ソフトバレーボール）

ひばりの会（手芸）

とよおか短歌会

豊丘すいれん花架拳クラブ

ベーカリー豊丘

虻川下流域三六災害体験談(16)

三六災のときに、上流から下流に流れた土砂はどれほどか？ その１

原　章（古畑）

☆とことん聞いても調べても分からないことが…☆

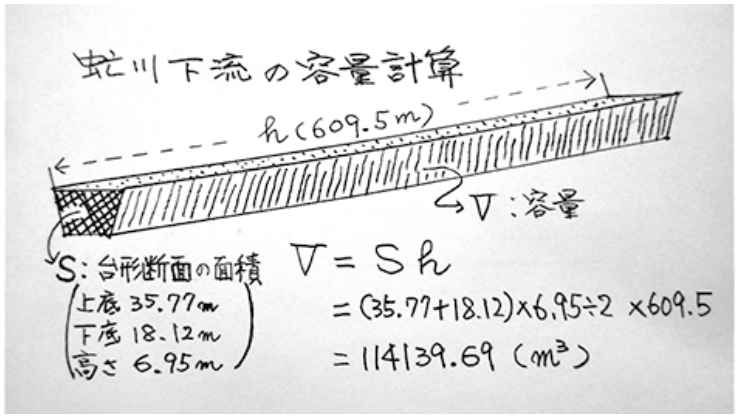
三六災の虻川下流のことをできるだけ詳しく知るために、可能な限り手を尽くし調べたりしましたが、既に分からなくなっていることもありました。

三六災の時に虻川下流へ、いったいどのくらいの土砂や岩、流木などが流れてきたのでしょう？流れてたまったものを除去するためにどれほどの作業が必要だったのでしょう？こういったことは、公的機関などにもあまり残っていないようでした。

☆三六災で虻川下流に流れた土砂を自分で計算した☆

どのくらいの土砂や岩石などが流れてきてたまったものなのかを、今の虻川下流域の河川構造でためられる量から、考えてみました。

新虻川橋から上村と北入の境界辺りまでが、比較的平で下流の堆積するところです。ここの虻川下流を図のように台形の断面の長い四角柱を横にした構造とととらえて、その体積（容積）を求めてみました。虻川橋付近の台形断面の上底、下底、高さと、新虻川橋から北入への入り口までの距離を測って計算すると、およそ十一万立方メートルと出せました。



（続く）

小中学校に初めてのSSS

（スクール・サポート・スタッフ）

学校は、新型コロナウイルス感染症の問題が浮上してから、今までとは異なる新たな対応に追われるようになりました。

五月下旬の学校再開から毎日、児童生徒の下校後に、教職員全員で教室やトイレ等、子どもたちが触れた箇所や教具を消毒するのをはじめ、家庭との密接な連絡、或いは教科指導の見直しや授業改善の検討など、「子どもたちの学びの保障」と「健康・安全」に関わって懸命な努力が続けられてきています。

このほど文部科学省では、新型コロナウイルス感染症対策に伴って業務が増えている先生を支え、子どもたちの教育指導に注力してもらうため、これまで大規模校に配置されてきたスクール・サポート・スタッフ（SSS）を、学校の規模を引き下げて配置することを決定したのです。

豊丘村においても追加配置を希望したところ、二学期早々の九月から、久保田直行（中学校）、原節子（南小学校）、磯部和文（北小学校）の各氏の配属が決まりました。具体的な業務は各校によりますが、放課後の学校内の消毒をメインに、学校給食の配膳補助、教材づくりの補助、ICT授業の準備、印刷業務等に取り組んでくれており、その活躍が期待されます。

（教育委員会事務局）

シリーズ「元気な高齢者」71

時計人生六十年　遠方からの顧客もあり感謝

仲平恒雄さん　九十歳
北市場三在住

昭和五年に高森町下市田において主に養蚕および米作で生計を立てていた両親のもと、三人きょうだい（男二、女一人）の末っ子の次男として生まれた。兄とは十歳も離れていたため親のような存在であった。兄は戦争に五年間行き二十二年に帰還し家業の手伝いをしていた。小学校は上段にあり、往きには三十分ほどかけて通った。

子供の頃から細かい物を触ることが好きで、高等科二年の時、飯田の城下グラウンドで開催されたグライダー（紙飛行機）飛ばし大会に参加した思い出がある。残念ながら入賞は逃したが、細かい物が好きという特技を活かし、学校を卒業後親と相談し時計作りの道を目指そうと、二十五年に高森にあった時計店に内弟子として入り六年間修行を積んだ。

その後自宅に戻り、三十歳で田村の現在地近くで開店した。ちょうど土地が空いており立地条件も良かったので即決した。しかし後に三六災害に遭うとは夢にも思わなかった。開店当初は、とにかく名前を売り込むことが必要と、高森町と大鹿まで出かけたが、そこでは世話役の方が隣近所の人に声を掛けてくれ、大勢が集まり一気に宣伝効果が高まるという幸運に恵まれ、当時の世間の熱さに感謝した。今でも大鹿から修理にきてくれる。本当にありがたい。

修理技術を磨き、四十一年に時計修理技能士一級に満点で合格した。飯伊地区で二人だけの栄誉であった。その後さらに研鑽を積み平成十六年には信州の名工に選ばれた。名工には、職業訓練指導一級技能士、交通運転無違反など幅広い高人格さを要求され、非常に名誉な称号である。飯田の時計商組合の会長を六年間、長野県時計組合監査員を六年間努めるなど信望も厚い。

六十年間に亘る職人人生の中で、最大の思い出は三六災害だ。あっという間に床上まで浸水し、やっとの思いで二階へ器具類を運び上げ難を最小限に抑えた。当時消防団員でもあったためその任務と、家業との板挟みで苦しんだ。

三十一歳の時、兄嫁の紹介により、五歳下で村内のハナさんと結婚した。ハナさんは家に留まり店の手伝いをしつつ恒雄さんを補助した。子供二人を授かり今では長男は眼鏡を担当している。

地域との関わりは、三十～三十五歳まで消防団員として従事、田村区委員を始め、商工会は若い頃に入会、今でも会員として存在感を示している。元来アルコールは体質的に合わず酒席では専ら運転手役を担っていた。

趣味は弓道で、三十代の頃から始めて五十代まで楽しんだ。週に二回は練習に励み飯伊地区の大会でチーム優勝した経験もある。他には弓道と同じ頃、家の直ぐ近くの天竜川で釣りを楽しんだ。またマレットゴルフは知人に誘われて始め、今でも時々汗を流すことがある。

最近は携帯電話の普及に伴い時計の需要が低調気味であり将来を心配している。ネジ巻き、自動巻き、電池式、ソーラー式、電波式と進歩しており、その都度新たな技術を習得しなければならないのは、仕事とは言えなかなか辛いことである。二十歳で取得した運転免許を重宝し、自宅から少し離れた場所にある畑で栽培している野菜の世話をするため、細心の注意を払いながら、今でも毎日運転している。

健康面では、胆石を患ったほか、職業病と言える腰痛に悩まされている。聴力、視力とも問題なく体力の続く限りは仕事を続ける意気込みである。テレビは主にニュースを見る程度であるが、最近の不安定で予測困難な世情は本当に心配だ。

多少の山谷はあったが、自分の好きなことを仕事にでき、悔いの無い良い人生だったとしみじみ思える。柔和な顔つきがそれを物語っている。この道一筋六十年、ご来店頂き可愛がって下さった多くの顧客に感謝し、更にハナさんの内助の功が大であったと感謝の言葉を何回も口にされた。

文責　桐崎長一

『豊丘村民話集』より

天竜川の簗漁

河野一馬

記録もなく、当事者から直接聞いたこともない。ただ幼いころのおぼろげな記憶をたどって書いてみる。

田村の河原で簗の盛んだったのは明治のおわりから大正の初めころであったと思う。それ以前のことは知らない。

私が小学校時代の夏の遊びは天竜川での水浴び（水泳）が唯一の楽しみで、毎日近所の友だちと誘い合って出かけた。七月の中ごろになると毎年、河原が簗かけの人たちでにぎやかになる。

竹を割る人、割った竹を編む人、蛇籠を作る人、丸太棒で牛（水の流れを弱める仕組み）を組む人。あまり知った顔のおじさんたちはいないようだったが、田村の人たちが多く、それに林や出砂原方面の人たちもいたようだった。そのなかで顔見知りは、北市場のかじ屋のおじさんと兄さんであった。おじさんは栄太郎、兄さんは久男という方で、栄太郎さんは簗かけの親方らしかった。久男さんは蛇籠を上手に編んでいた（後で聞いた話だが、栄太郎さんは文字通り簗かけの棟梁で、毎年先に立ってこの事業をやったがいつも損害ばかりで、資材を投入したがほとんど全財産を失ったほどであったとか）。

この仕事を見るのがおもしろく、そばへ寄ると邪魔だからあっちへ行けと叱られたものであった。

こうして数日後、大体の資材ができあがると、いよいよ簗かけとなる。どのようにしてかけたか詳しいことはわからないが、川幅が広く、瀬の荒くない場所へ、岸から川の中ほどまで、真っ直ぐに蛇籠で石積みをして段を作る。その下へ簗場を作る。子供たちが普通に作るのと同じ理屈だが、ただ大仕掛けで、幅は五、六間もあり、簀の丈も一間余りで、一通りで五、六枚を二段ないし三段に敷き詰める。簀の台も頑丈にできているので簀の上は十人や十五人は自由に走りまわることもできた。

これは荒簀で、簗のもとの水落ちのところへは別に編んだ目の細かい簀が置かれ、アユが落ちたときに洩れないようになっていた。なお、簗の一方はほとんど九部通りにわたる斜めの堰を作った。これには牛や蛇籠を使い、水中には簀を張ってアユの逃げるのを防ぐと同時に、簀を伝ってアユを簗へ誘導することも考えられていた。

これで大体出来上がりだが、その他に簗番の小屋を作るとか、捕ったアユを一時飼っておく生け簀として直径一間もある大きな魚籠が二つ三つ、簗の傍らに水に漬けてあった。

元来、簗漁はアユが成長して川を下る習性を利用しての漁法だから、川を下ってきて簗に落ちるのを待っているわけだ。したがっていつ落ちるかわからない。簗番がときどき見回って、簀の上に跳ねているのを竹箕で拾っては大魚籠へ入れる。うっかりすると勢いの強いアユは落ち口の滝を上って逆戻りするようなこともある。

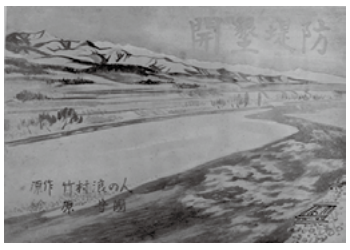
晴天のときはあまり落ちないが、雨が降って水の濁った時などは、一人や二人では拾いきれないほど落ちるときもあった。こうして数日後、魚籠の中にだいぶたまるといよいよ配当ということになる。

ちょっと話が後になったが、簗かけは大仕事である。だから個人ではなかなかできない。今年も簗をかけるとなると、発起人の人たちが仲間を募集する。一口何円（たぶん一円くらいであったか）として村内はもちろん、村外まで募集したようだ。資金がいくらかかったかはわからない。それで配当も一口せいぜい一尾か二尾で、鉄針でアユの口を通して配ってくれた。期間中、そう何回も配当はなかったように思う。

ただ、ある年のこと、数十尾の配当があったことがある（あるいはその年の持ち口が多かったのかもしれない）。このとき一度に食べてしまうのは惜しいというので、腸はアユのわたとして塩辛にした。これは腹痛のときなど薬として飲まされたが、恐ろしく苦かった。身は串刺しにして焼き、鴨居に挿して来客用に備えた気がする。ときどき飯田方面から簗場見物の客が来て、小屋で焼いているのを見たこともある。

一番落ちるのは台風などが来て大水の出る直前で、そのときはそれっというので仲間はもちろん、一般の大人も子供も簗場へ集り、ひっきりなしに落ちるアユを拾い大騒ぎである。しかしそうした折はたいてい次第に水かさが増してきて危険となり、簗の上にいた者は素早く退去し大漁を逸してしまうが、運が悪ければ簗も押し流されて今年の簗漁も終末となるわけだ。お生まれが昭和の初期と考えると、戦後もかなり早い段階で物語を書き上げていたものと推察します。

（資料館主任　唐澤武彦）



こちら資料館 208

DVDになった紙芝居『開墾堤防』

先月の公民館報に載った伴野区制作のDVD「開墾堤防」について少し付け加えさせていただきます。

DVDの元になった紙芝居（写真）は当資料館で保管していた物ですが、何時、誰から等、当館に至る経緯は全く把握できていません。（現在は村図書館で保管）また、今回のDVD化の過程で実はこれがコピーであることが判明しました。原本の存在は未だに不明です。

原作は飯田の講談師竹村浪の人、絵はやはり飯田の原守國が担当しています。

DVDにするに当たり、お二人の縁者に著作権関連の許可を得るため、子孫探し等、かなりのご苦労があったとお聞きしました。

内容は、館報で紹介されている通り、対岸の惣兵衛堤防に負けない頑丈な堤防を伴野に築き上げるため、私財と命を削って尽力した松尾千振（多勢子の孫）と、彼を支え幾多の苦難にもめげず偉業を成し遂げていった「開墾組」の仲間達との感動の物語です。

制作の時期ですが、浪の人は東京大空襲で帰郷するまで東京にいましたので、少なくとも戦後であることは確かです。また、この紙芝居を収めた「語りつぐ天竜川27」（平成三年発行）の後書きに『…松尾家出身の下平元護氏（中川村在住）は、少年のころ家に来て資料を調べている浪の人のことを覚えている…』という記述があります。元護氏の

俳句　短歌

花木槿目映い程に朝の刻　磯部セツ子
走馬灯追ひつ追はれつ夜を重ね　田中　静
コロナ禍の盆は夫との二人きり　片桐　洋子
原爆忌烈日の中黙祷す　森田　恵子
明けやらぬ眉引くような夏至の月　三島　里子
夏薊競う羽音に蜜匂ふ　木下　眞水
八月一日おやき供へる日　松岡　照子
病む兄へふるさとの香の茗荷掘る　宮下　純子
山鳩の声のまろみや今朝の秋　林　恵美子
打水に庭の草木の匂ひかな　丸山　時子
夜は星の滴りささやく吊舟草　矢島千勢子
砂針の頭蓋に絡む酷暑かな　池田　美和
鍋の焦げ磨きしのちの今日の月　細井　恵子
夫いまだ還暦なりや盆の月　河手　洋子
灼け灼けて嶽のちぢ万りぬ原爆忌　北原　昭子

〈とよおか短歌会〉

急逝の友とはついに逢えずして遺影を前に目頭うるむ　壬生　千春
四季のある美しき日本に生まれ来て穏やかなりし日日を祈りぬ　大倉　知江
一歳の妹泣けば抱っこしておもちゃ持ち来る四歳の兄　筒井　恵子
「ぼけない会」泣いて笑って寄り添いし友らは今やそれぞれの日々　毛涯百合子
わが村が山崩れとの報道に知人たちより気遣う電話　福澤貴美恵
玄関に小さきスロープ設けやりぬ老犬十五のおたんじょう日に　大原眞由美
コロナ禍で感染者多き全国の知事さんの顔おなじみとなる　松尾ヒサコ
長雨に根ぐされおこすを気遣いてつゆあけ待ちて妻と薯ほる　松下　泰見
コロナ禍で帰省かなわぬ孫たちのオニヤンマ追う姿なき夏　北澤　秀子
やがてくる老老介護はどちらやらスイカ喰いつつ顔を見合はす　福澤　亀人

川柳

〈豊丘村川柳クラグ豊柳会〉

▼課題「紙」　福沢勝美　選
重い記事軽い紙面にいっぱいだ　林　もも子
親切かお節介かは紙一重　市沢　照子
新聞紙コロナの記事で満艦飾　神稲　邪道
紙よりも薄い総理の式辞文　山本　義彦
軸吟…一枚の赤紙うらむ征ったきり

▼課題「寿」　互　選
傘寿過ぎ米寿届くか今生きる　安田　喜子
腰伸びて寿命も延びる露天の湯　西元　峯子
温暖化地球の寿命狂い出す　小澤　凛
コロナ禍で寿司屋居酒屋閑古鳥　桃沢　健介

▼自由吟　桃沢健介　選
県外のナンバー言い訳つけている　久保ひろし
黒い雨の被爆者眠り「遅すぎる」　原　美風
核廃絶言わぬ首相の原爆忌　福沢　勝美
天国はコロナのいない別世界　鎌倉美登里
軸吟…失政続きマスク小さく雲隠れ

公民館文化祭作品展　開催

11月15日(日)～23日(月)
交流学習センター ゆめあるて
公民館グループの作品をはじめ、趣味で作品作りをされている方の出品もお待ちしております。
個人出品の申し込み締め切り
10月30日　公民館まで　☎35－9066

STOP! コロナ差別

「コロナを倒す正義の味方は、私たちの心の中にいます」
差別や偏見はダメ! 感染した人が悪いんじゃありません
悪いのはコロナウイルスです

そらく九月末日まで満足に残ったことはほとんどなかったように思う。したがって巨額の資を投じた簗もおそらく儲けたことはなく、何というか今にして思えば男性的な夏の一大行事であったわけだ。

補記　簗は時に出砂原側の河原にできたこともあった。

（豊丘村民話集・第壱輯〈昭和五十二年〉より）

文責：壬生雅穂

冷凍カットフルーツに夢をかける

地域おこし協力隊　前田隆幸

このたび、豊丘村堀越地区胡芝に南信州クリエイション株式会社を設立し、冷凍カットフルーツ工場を建設いたしました。

弊社は、豊丘村地域おこし協力隊の前田隆幸と杉山豊の二名で設立した会社です。私は観光促進を、杉山は移住定住を担当し、お互い観光客や移住希望者の誘致活動を行ってきました。協力隊の活動を行いながら、今後、この村で私たちが出来ることはなんだろう?と考えていました。協力隊の活動を通じて移住者だからこそ発見できた地域の素晴らしい人々・文化・景観・自然・食などの「宝」の数々。反面で移住者が抱える様々な悩み。協力隊任期後の就職・定住問題など、多くの課題も見えてきました。二人で話し合いを重ね、地域の「宝」を活用し、移住者が地域とともに活躍出来る会社を作ろう！と、目標を立てました。早速、内閣府で六次産業・地方創生関係の仕事をしている知人に相談したところ、東京で特殊急速冷凍フルーツ事業を開始した㈱デイブレイク社を紹介されました。デイブレイクでは、規格外として廃棄されたり低価格で取引きされていたフルーツの傷み部分を手作業で取り除き、一口大にカットして冷凍し、これまで捨てられていたフルーツに価値を与えて販売しています。これはフードロス対策になる画期的な事業です。今後、私たちはこの商品を豊丘村で製造していきます。

豊丘村に移住して二年が過ぎましたが、生活環境にも慣れ、多くの人々の協力で起業も出来ました。移住者である私を受け入れてくれた豊丘村に貢献できるよう、私の出来ることをさせていただきます。

今後は、長野県全域のフードロスを減らすべく、多種多様なフルーツを豊丘村に集めて冷凍加工を行い、豊丘村から信州の美味しいフルーツを、日本だけでなく世界の人々の食卓に届けられるよう、夢を大きく持って進みます。

▲冷凍カットフルーツ工場

◀製品サンプル

～シリーズ～ No.200 豊丘の自然

オオケマイマイ
（ナンバンマイマイ科）

ある会で話をすることになった。その時に使う資料を参加者分、印刷してほしいとお願いした。すると、参加者数が分からないので別の方法にしてくださいとの返事。今までに経験したことのない対応に、びっくりした。「参加者はお年寄りが多いのでB４ではなくA３にしますね」とは真逆。

前置きが長くなってしまったが、今日の主役は滝川の梅畑で見付けたオオケマイマイ。なんだか新型コロナウイルスに似ているので、この時期に紹介するのはイメージダウンになってしまうのではないかとも思ったが、コロナは〝太陽のまわりにあらわれる銀白色の冠光〟で悪いイメージはない。イメージとは、やっかいな心の動きだ。

（山田　拓）

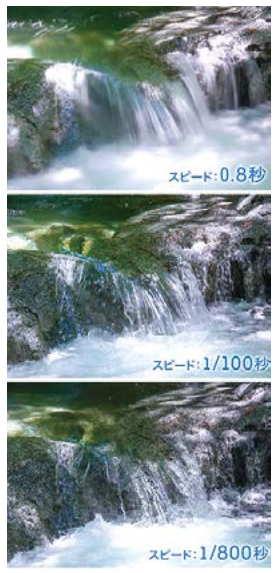
写真が好きになる上手くなる 撮りテク術

写真初歩テクニック 4

前回は絞り数字を自分で決め、撮りたいものだけにピントを合わせて他の背景はぼかしたり、反対に全部にピントが合うように絞り込んでスピードはカメラ任せの［絞り優先モード］をお話しましたが、今回は動きを止めたり流れた表現にするための［スピード優先モード］を話してみます。例えば運動会で盛り上がるかけっこがあります。走るのが速いことと、我が子を写そうと必死になれば望遠で撮影しています。すると人物がブレたりボケたりすることが多く見られます。これを最小限に回避するには速いスピードで撮影することが求められます。川の流れも同じように絹を流したような表現はスピードを遅くすれば、見たこともないような美しい流れを作れます。反対に速いスピードでは動きを止めて水のひと粒を見ることができます。どちらも自分で遅くするか動きを止めるため速くするかを決めることが大切です。

夏の季節は流れの速い虻川での小滝を例に比較しています。機材はコンパクトカメラですので大げさな三脚は必要ありません、小型のアンテナ三脚で十分です。スピードを遅くすると水は線が幾つも重なり幻想的な流れを作ることができ、これよりも徐々にスピードを速くしていくと水の粒が跳ね上がり空中で止まって見えるようになるのです。同じく野球のボールが空中で丸く写った写真は、三コマ目の速いスピードで写したことになります。

固定できる最小限のサイズの三脚で十分



スポーツ写真では速いスピードで写すことが多いのですが、風景写真は一枚の写真の中で時間を写し込む表現手法により、長時間露出もひとつのテクニックとして用いられています。流れを筋を描いたように写すには長い間シャッターを開く必要が出てきます。三脚はもちろんもう一つ何かを変えなければなりません。ISO感度を小さな数字にして更にレンズ前に特殊フィルターを着けることで、初めて流れは筋を描いてくれます。

秋は流れを遅くして紅葉などと絡め、夏は水滴を止めて涼しさを表現しよう。

写真・文　宮下正弘

北の大地にあこがれて ～ロシアへの旅路～ #7

津田孝平

タンタタン、タンタタンと列車は心地よいリズムで見知らぬ景色を後ろへ後ろへと流していく。北京の煙たい空気を抜ければ都市と大草原とテント式住居「ゲル」が混在するモンゴルが広がっていた。この国で私は一つ歳を重ねた。男の二十四歳は本厄。前厄であまりついていなかった私は冗談半分で本厄は日本を離れようと渡航の時期を定めた。

北京駅から国際鉄道が走っている。モンゴルを経由し、ロシアの国境からシベリア鉄道に繋がり、モスクワまで到達する。六泊七日、一週間の旅路をずっと鉄道の中で過ごす経験は日本では味わうことのできない広い大陸ならではの文化だ。ただ飛行機を使えば一日もかからずに到着してしまう旅路を一週間かける鉄道の非効率さは現代ではほぼ廃れ、おかげさまで私は四人部屋のコンパートメントを一人で独占していた。隣のコンパートメントはモンゴルの家族がおり、反対側はオーストラリア人の女性が一人、コンパートメントは六部屋あるにもかかわらず、私たちの車両は半分ほど空いている状態だった。隣の車両に移れば、鉄道関係者の車両があり、その次の車両は中国人しかいない車両があり、その先はヨーロッパ系の人たち、その先は高級車両となっていた。車両を住んでいる地域で分けることは、人種差別のようにも思われるが、一週間の長旅の中でトラブルやストレスを減らすために似たような生活圏、文化圏、価値観で分けることは配慮なのだとも思える。列車にはレストランがついており、先頭車両とレストランを、国をまたぐごとに入れ替えるのもまたおもしろかった。

こうして始まった一週間の列車生活。当たり前のようにインターネットはなく、私は仲良くなったモンゴル人の青年たちとトランプをしたり、お互いの言語を交換し合ったりして過ごしていた。モンゴル語は子音の発音が難しく、何度も発音を直されてしまった。他国の言語を勉強するたびに発音が難しいと思うところを見ると、日本語の発音は比較的簡単なのかもしれない。

食事はといえば、食堂車両を利用することもできるのだが、単価が高いので、大体は停車駅で購入をしていた。列車の停車時間は駅ごとに違い、短いと五分程度だが、長い時は一時間ほどあることもあるため、ときどき駅を出て町の中の売店に買い物に行くこともできた。何時に発車するかはわかっていても、時間を過ぎれば列車は無情にも駅を出てしまう。列車を離れれば離れるほどに心はそぞろになり、なんだかチキンレースをしているような気持ちで友達と買い物をした思い出は今でも心に残っている。そうして入手したピロシキやチョコレート、魚の漬物にパン、それら戦利品を仲良くなった友人らと分け合いながら、私たちはモスクワを目指した。